

---

# 神様と会ったかもしれない日

彰子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神様と会ったかもしない日

### 【Z-ONE】

Z0382F

### 【作者名】

彰子

### 【あらすじ】

一月十七日。バレンタインデーより三日。ふられた。ああ、ふられたよ完膚無きまでにね。だからって自称神のオタクとどうしてキヤツチボールをしなきゃならないんだ？

(前書き)

注意：この主人公の混乱癖は激しく筆者に似ております。

一月十七日。この日、私は神に会つた。

遺書。

前略、神様。

あなたの存在を私は認めません。  
ええ、認めるものですか。

だれがなんと言おうと、あなたのような存在があつてはならないの  
です。

だつて、私がふられたから。

あなたにこびて、こびて、こびまくつたのに、ついでに近くの神社  
を経由して千円の贈賄までしたのに、ふられたから。

草々

追伸　あなたがもし存在するならば、これから私はあなたの元へと  
旅たたなくてはならないはずですが、大丈夫です。だつてあなたは  
存在しないから。私はあなたの間抜けな顔を挙まずにそのまま未来  
の地球へ復活し、七つの玉を集めてくれた未来の彼と結ばれるの。  
オッス、それじゃみんな、元気でな（悟空風）

私は五十三枚目の遺書下書きを丸めて窓から投げて捨てた。  
ああ、ばかなことを書いてしまった。

私の名前は石山多恵。

彼氏に先日ふられた石山多恵。

しかも、浮氣の相手のほうがむしろ本当の彼女みたく「あんた誰」つてな態度で公園で彼氏とキスしてたからそいつに逆切れしたら彼氏が本気での女とぐるになつて「お前は誰なんだよ」つてな態度に出てきたからご挨拶程度に軽くビンタを食らわしてやつたらパンチでお返事が来て一本歯が抜けたから妖精が金貨をくれないかなと夢見てるのと友達に相談したらドン引きされて誰にも連絡がとれなくなつて悩んでいるところへあの女から「消えろ」のメールが来たからちよつとテンションが上がって「あんなやつのことは忘れて一度友達になりませんか」とさわやか系のオーラを出してメル強敵になつてから一気に地獄の底へご案内するつもりだつたのに返事が「失せろ」だつたのであこれは彼氏だなと持ち前の直感力<sup>セフンセンシス</sup>で気づきパソコンからそのアドレスへ別の女を装つて破局に導こうとしたのに逆にやつらは業者に頼んで私の忠実な相棒であつて水谷豊ではないパソコンを再起不能にしたため丑三つ時に神様とやらに千円の賄賂を渡してやつらが永遠に愛を誓えないようにしてから近くのコンビニで買つてきたガリリ君をガリガリいわせてやつたら流石に冬にガリガリはねえだろうと胃が悲鳴を上げたので急いでトイレに駆け込んだらそこで白い朝を迎えた、石山多恵。

トイレで泣いて、鼻をかみかみ泣いて、ラジオから流れる工藤静香の『泣いて』をバックミュージックにして泣いて、遺書書いて死のうと思つて泣いて、実行できないから泣いた、石山多恵。

そうです、わたすが石山多恵どうえす。

言つてみただけだから。志村けんのつもりで言つてみただけだから。

泣いた。

泣いた、笑った、そして泣いた。ありがとうございました、オリンピック、感動をありがとうございました。

言つてみるもんだ。

私、石山多恵はオリンピック気分を一瞬だけ味わった！  
感動がよみがえった！  
…腹が減った！

まったく、私の胃袋つたらき・ま・ぐ・れ（キラッ）

そんな穏やかな引きこもり生活＝日田の朝に、チャイムが鳴った。

うふふ、私が最高に落ち込んでいる時に一体誰かしら？  
つまらない訪問販売かしら。

それともあの女かしら。

それとも愛しの彼氏？

はたまた全然連絡をよこさない冷たい友人たち？

いずれにしても殺つ<sup>や</sup>てやる。

私はドアを開けた。

「石山多恵かね？」

「どなたですか」

「私が神だ」

そしてドアを閉めた。いけね、肝心の包丁を用意してなかつたよ。

「おー、何だ、せつかく会いに来たといつのこ

『 むーかいのお宅に住んでる、年齢不詳の自由人  
あーいつはあいつはオタクなとしうーえの男の子  
二十四時間ネトゲ三昧、二次元だけが好きな  
ふいいーあーるわーいえぬいーあーるでいー ( very nerd )  
にんーげんとして、どうかしら  
はーつきり聞かせてー』

キャンディーズの往年のヒット曲に乗せてお向かいさんの印象を歌  
つてみました。

つて、なんでそんな男が私のアパートの前に現れるのよ?

私はおずおずともう一度ドアを開けた。

「あの」

「私が神だ」

『 何が私がかみだだよ何気なくかみとかいっちやつて何様のつもり  
つてあ神様かあははそだよね神様だよね私つてばかーでもさどう  
して神様が現れちゃうわけ不思議よねまじでこんなしがない失恋派  
遣社員のところにどうしてきちゃうかな神様がそつかー神様つてき  
まぐれだもんねーじやさ私の失恋もてめえのきまぐれというわけか  
えこらどうなんだよてめえなまはんかな答えじや許さねーからな適  
当なことを言つてんじやねーよそこんとこどうなんだ顔か私の顔が  
原因でこんなひどいふられ方になつたのかそれともあれかスタイル

とかかばかやうう自分で言つのもなんだがどうちもけつこつい線  
いつてるぞばかやううあれ言つちやつたよおい言わせりやつたよお  
いおいしかも断つておぐがおいおいつて言つてるけど私は中尾彬の  
物まねをしてるわけじやないからおいおい言わせてはてめえ  
の唐突でしかもそのなりでいうと全く似合わない「自称神様」発言  
だからだいたいそのうつとうしに長髪を切れよつてあまさかかみか  
みつながりで切れないとか言つんじやないよなまさかとにかくあん  
たが神様つてどういうことだよつうかえまじでの神様?』

私の頭の中を駆け巡つた混乱はだいたいこんな感じだ。

男は続ける。

「まず質問について答えよう。君と彼氏はもともと性格が合わなか  
つたのだ」

「お帰りください」

なんだこのやうひふやけたやうひだこのおたくやうひは…

「それからこの男が髪を切らない理由は、お気に入りの散髪屋にホ  
モセクシャルの理髪師がアルバイトとして雇われていてそのアルバ  
イトに散髪される間ずっといやらしい言葉を投げかけられ続けたた  
めに、その散髪屋だけでなく散髪という行為全体にトラウマを抱い  
たことによるのであって、かみかみなどといつ「冗談のためではない。  
そもそも、この男は私の」

私、石山多恵は左手に隠し持つた包丁で正当防衛として相手に斬り  
かかった!

「…」Jとなど全然考えたことはなく、むしろ頭の中はアニメの中の女子に対する情熱と妄想でいっぱいだ。しかし君も無茶なことをする。これでこの男が密かに家でカポエラを習つて居るところにしなくてはならない

皆さん、『飢狼伝説』ってゲーム、ご存じですか。スーパーファミで発売されたこともある格闘ゲームなんですが、私、そのスーパーファミ版の最初のやつをやつたことがあるんですね。その後の続編はやつたことがないんですが、なんかカフエみたいなところで戦つたのを覚えてます。そこで確か力ポエラとかいう格闘技を使う敵キャラクターと戦つたというのも覚えてます。名前は忘れましたが、その力ポエラ使いは半裸のおっさんで、気持ち悪くなるくらいに足を動かして私の操作するテリー・ボガードに攻撃を仕掛けるわけなんですね。ま、必殺技のバーン・ナックルで瞬・殺ですけれども。

伝わる人にしか伝わらないかも知れないけど、もしその足技みたいのが目の前のさえない長髪のオタクによって繰り出されたとしたら、どうします？ それで頼みの綱である武器が手から弾かれたとしたら、どうします？

セ「ムしますか？

かわいい叫び声を上げて助けを呼びますか？

私は叫びました。

「私は神だ。君が私にひどいメッセージを送るから、思わず来てしまったんだよ」

「そつこつ」ときいてんじゃねえんだよおおー てめえはだいたい神でもなんでも…は?」

「信じてくれない方が好都合だ。…びつしたんだ?」

私は頭を回転させてこれまで男の中で交わされた会話をもう一度思い起こした。  
そして愕然とした。

「私の気持ちがなぜわかるの…? なぜ私が失恋したことや、びつせあんたがくだらない連想で髪を切つてないんだろう? こいつ予想までわかるの?」

「神だからだ」

足をぐるぐると回すカポエラ独特の踊りを披露しながら答えるサラツサラヘアの男。

「まさか、本当に…?」

「いや、信じなくていいよ。とこより、信じてもうつては困る。一つ合理的な答えを用意しあう。第一に、君が失恋したことはこの近所ではちゃんと噂として出回っているし、しかも君自身がそれを窓から投げ捨てた五十三枚の遺書で保証している。第一に、君だけでなく、この男を見た瞬間に誰もが髪を切れと言つだひつという予想が男自身にあるとしよう。そんな男が自分を神様だと言い始めたら、理性のある人間ならばまず「だから髪を切らないのか」という冗談めいた結論を考えつくだろうという予想が男にも立つわけだ。しかし、このような面倒な説明をするのはやつかいだから、男が読

心術を使える、といつゝとした。「

体をのけぞらした状態でペラペラとよくしゃべる。

あ、そういうことね。

「…ああ、そうですか。つまりあなたは私のストーカーといつわけですか」

「なぜそのような理解になるんだ…？」

「だつて、そうでしょう？ 初めて三次元の人を愛してしまった、それが私だった。そうでしょう」

「いや、だから」

「そうに違いない。かわいそうに。私の美貌に見とれて気が狂い、ついに数年間出られなかつた部屋を後にして。そして私の部屋の前まできた。ところが自分には自信がないものだから、テンパつて思わず自分は神であるなどとテスートまがいの発言をしてしまつた

「……」

『私の失恋やちょっとした機微がわかる理由はあなたが私の熱烈なストーカーだからできつとこれまであの部屋の中ですつと私を望遠鏡で観察していたに違いないわざらにあなたは私のごみばこをあさつたり毎日の行動パターンを綿密に調べたりしたんだわああ怖いしかもついにいきつくところまで来てしまつたでも悪いのはあなたじゃないわまるで私がアニメに出てくる ちゃんのように美しいからあなたは精神を乱されてしまったのね私って罪な女かわいそうに

すべて私が悪いんだわ。」の美しきがる私が』

「……とにかく、」の男が神ではないと思つてくれればそれでいい

立ち上がつた男はやや真剣な表情でやつ言つた。

「で、用件は何ですか？」

自分を第三者のように呼ぶかわいそつなストーカやうつなので、私は少し話を聞いてやることにした。

「キャッチボールでもしないか」

「はい？」

「キャッチボール」

いつのまにか男の両腕は、グローブ一箇とボールを抱え込んでいた。

「日の光を浴びるものだ」

「結構です。私の家には松崎しげるもびっくりな紫外線照射装置がありますので」

「嘘はやめておけ」

はこきた命令口調。

『は？ おじおいおい何か勘違いしてないかこら私はただかわいそうなストーカー やうにただ慈悲を垂れているだけであつて別に 1

パーセントの好意すらてめえには抱いていないわけでそんなやつとキャッチボールなんぞする必要はさらさらないしかも私は今日体調が悪くて寝こんでいるという体で会社には連絡してゐるんだそれが外でキャッチボールなんかした日には「あどうよ！」近所中の噂どころじやねえんだよ悪くすりや首になつちまうだらうがてめえもストーカーならそれくらい調べてもつといいタイミングの時に誘いにこいやまあその場合でも即お断りだがなからに言わせてもらえばもつとましなデータに誘え金のかかるやつなショッピングとかショッピングとかええい面倒だなみつげお前私にみついでしまえじゃんじゃん金を使って私を喜ばせるようなことをしてみるそれくらいいつもフィギュアにつき込んでいるだらうとにかくキャッチボールつてどういうチヨイスだよ。』

「よく映画であるだらう、キャッチボールで心の交流をとるこういう場面が」

遠い日をするストーカーやらう。

「あのー、あなたと心の交流なんぞ必要ではない私ですが

「神とキャッチボールだぞ。こんな機会はめったにない。いいから、キャッチボールをするんだ。どうせ暇だらう。」

かわいそうに。このストーカーやらうはアニメと同じようこの女の子とキャッチボールをするのが夢なんだ。

「いいですよ」

「やうか、では早速河原に」

「どうもこうと思つたかぼけがああああ

勢いよくドアを閉めた。

部屋に帰つた。

テーブルにつつぶした。

彼からのメール。

スーツを着たいい大人が中指を立てた写メール。  
愛していないのサイン。

夕方になつた。

あの男はきっと河原にいる。

そう思つた私は、興味本位で河原へと向かおつとドアを開けてみた。

「お、気が変わつたか」

やつが、いた。

何時間ここにいたんだろう？

負けた。根負けした。私以上にしぶとい執念を、この男は持つている！

「ええ、行きましょう」

そこで私はこの男とキャッチボールすることになつた。

人生、何が起こるかわからないものだ。

私は夕日を背に、グローブをはめる。

「よし、それでは始める」

オタクがボールを投げた。私はそれを受け取る。

「ナイスキャッチ」

オタクと河原でキャッチボール。我ながらシユールな光景だなと思う。

「あんたさー、暇だねー」

剛速球を投げながら、私は話しかける。

「…危ない投げ方だな。弁慶の泣き所付近に当たるとこがだつたぞ。

おお、小学校の頃これをとれる男子はなかなかいなかつたのに。

「これでも神だからね。忙しい時は忙しこれ」

緩いカーブを作つてボールが飛んでくる。

「じゃあさ、仮にあんたが忙しい神様だとして、何で私とキャッチボールしてゐるのよ」

私は全力で、すねを狙う。

「…君はいつも闘争本能をむき出しここするな。…神にだつて、仕事がいやになる時だつてあるさ」

緩いボールばかり投げやがつて！

「たとえばどんなことだよ」

私はキャッチするといすぐ「投げ返す。

「地球……温暖化とか……世界で戦争がなくならぬこととか

「あんた仮にも神様だらうが！ 何とか……しりやー！」

「おいつー 意地でもすねを狙つのはやめやー 色々事情があるのだよー」

「どんな……事情だよー」

「いつのまにか私たちは本気で投げ合ひよくなつてこつた。

「たとえばー 君たち生物の理解の外に生じるよくなつては……起きなかつたとれてしまつ」ととか

「どうこひ…意味だよー」

「いつも…試してはいるんだよー 地球を完璧な楽園にしてみるとか、戦争を人間の本能からなくすとかー」

「できて…ねえじゃねえかよー」

「いや…できてはいるんだが…、ふう、それは結局君たちの意識には登らない。君たち人類が一部は発見している宇宙の原理にのつと

つていらない現象が起ると、この世界は眠りについてしまつのだ。  
そして私はまた世界を元の状態に戻すしかなくなる」

「なんだそりや。 RPGのやりすぎじゃないの？」

「気が抜けた私はとてもスローなボールを投げた。

「そもそも一部の変人をのぞけば、私の存在をそのまま受け入れる人間だつていい。人は、理解できない現象は、夢かマジックとして受け入れるものだ。君だつて、私が最初にそのままの姿で現れたときには『これは夢だ』と思い込んで卒倒してしまつたじゃないか

「なにを…わけのわかんないことを言つてるのよ」

「君にその記憶がないのも当然だ。いいかい、私は君のところへ五十一回訪れている。なぜか？　君が私にその回数分遺書で『きさまの顔など拝むか』等々の呪詛をまくしたてたからだ。ところが、私自身として君の前に現れたときの君は、たいてい夢と思い込んで卒倒するのだ。そして記憶を失う。だから、私は君にとつて理解の範囲内である『オタクの男が自称神として目の前に現れる』という選択をした」

「いつ、もしかしたらやばい宗教の勧誘でもしにきたのかしら？」

「違う」

「じゃあ、そんな苦労をしてまで神様が何をしにきたのよ。

「人生は捨てたものじゃないと言つにきたのだよ」

そんなこと教えてもらわなくとも知ってるわよ、このストーカーやるわ。

「そうかね。君は人生を捨てようとしていたんじゃないかね。たかがひどくふられた程度で」

そうだとして、それがあんたに何の関係があるの。

「確かにそれほど関係はない。だが少しむつとくるじゃないか。一生懸命改善しようとしている世界に存在する人間が、私を呪いながら死ぬなんて」

……。べつに私、この世を去るつもりないですから。

「それならいいんだ」

沈黙。  
キャッチボールだけが続く。  
日が暮れてきた。

「映画の受け売りだが」

男はボールを投げながら切り出した。

「人生はキャッチボールに似ていると私は思つ

投げ返す。

なにいきなりくさ」「こいつちやつてるの」「おたくやうひは?

「別に何かをきそつわけではないんだ。投げる、受け取る、投げる、受け取る。それを繰り返すことに意味がある。呼吸もそうだ。吸うと吐くとを繰り返すこと」に意味がある」

恋愛でもそつだ、とでもいいたいわけ？

「そつだ。しかし、いつかキャッチボールもやめなくてはならないときがくるだろ？」「

……。投げ返す。

「さつき、人生はキャッチボールに似ていると私は言った。だが、人生はもう少し複雑で、キャッチボールといつても、それは一人だけでやつているものとはたいてい違っている。たいていの人生は、さまざまなものや人と、さまざまな方向で同時にやっているキャッチボールに似ている」

だから何？ ボールを受け取る。

「一つのキャッチボールが終わつたからといって、すべてのキャッチボールをやめる必要はないということだ」

私は泣きそうなのをこらえて『だれがほかのキャッチボールをやめたつていうの』と心の中で強がる。

「いいや、そんなことはだれも言つていない。現に私とキャッチボールをしている。そして、これからも君はほかの人々とキャッチボールをしていくことになる」

「…あんた、本当に神様？」

投げ返す。

「…まあ、それでもないさ。…それじゃあ、ここでお別れするとしよう。ああ、この男が向かいの家に当分戻らなくとも気にする必要はない。合理的な説明を君に与えておくとすれば、この男はこの後ひさしぶりに外に出たのを喜んで早速マンガ喫茶へ直行し、その後数日間を難民として過ごすことになる。では、」きげんよう

男は走り、そして見えなくなつた。

私はグローブを男に投げつけた。

「このほかが、かうこつけてんじせねえよお」

暗い土手に、何かがぶつかる音がした。

人間にものをふりけられるのははじめてだ。

空に声が響いた気がした

動搖した声がちいさとおもじりぐて  
笑えた

私に家に帰り　眠つた

次の日から私は生活を元に戻した。

結局、その日起きたことが非現実的すぎてそれが夢だったのかどうか起きてみると判別がつかなくなっていたため、あのストーカーや

ろうが神様だったのかどうかは不明だ。そもそも冷静になつて考えれば、ストーカーだからといって心が読めるはずもないのだ。私はその日のことを思い出すと、いつも混乱して考えるのをやめてしまう。

そんなわけのわからない日とは無関係に今日は始まる。

そして私は今日もいろんな人とキャッチボールを続けている。

(後書き)

おもしろいこロメティイが書けない（つこでにまつと）Hマークマンが倒せ  
ない）  
ご容赦。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0382f/>

---

神様と会ったかもしれない日

2011年1月12日21時36分発行